

「畜産物消費者モニター令和4年度第1回アンケート調査」結果概要

令和5年1月31日
(一社)大阪府畜産会

I 「令和4年度第1回アンケート調査」の実施方法

○調査時期	令和4年11月～12月
○調査方法	メール・FAX・郵送方式により配布・回収
○調査対象者	(一社)大阪府畜産会「畜産物消費者モニター」155人
○調査票回答者	66人(調査票回収率・有効回答率42.6%)
○調査主要課題	近年における畜産物の購買動向及び畜産物のトピックス 的情報等について
○調査事項	別紙「調査票」のとおり

II 回答者の属性

(単位：人、%)

	合計	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
男女	11 55	0 0	0 0	3 1	3 18	2 15	2 18	1 3
合計	66 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.1)	21 (31.8)	17 (25.7)	20 (30.3)	4 (6.1)

注：調査結果分析では、20代、30代の回答者はなく、50代以上の回答者が主体となった。
また、男性の割合が若干増えている。(14.2%→16.7%)

Ⅲ 調査結果の概要

1. 日常購入する牛肉について

牛肉の購買傾向について調査した。複数回答の結果ではあるが、「国産交雑種」とした回答が最も多く、次いで「国産和牛」、「輸入牛肉」の順であった。

輸入牛肉における産地については、「豪州産」がわずかに「米国産」を上回り、「その他」の回答はなかった。

また、「買わない」とした回答もなく、全ての回答者は牛肉を常食としていていると考える。

2. よく購入する牛肉の部位について

複数回答であるが、最も回答が多かったのは「切り落とし」で全体の半数以上を占めた。次いで「肩ロース」、「バラ」と続いた。安価であることと、一般的に広く料理に利用されている部位が購入部位として人気が高いと考察できる。

3. 日常購入する豚肉について

豚肉の購買傾向について調査した。回答数が最も多かったのは「国産豚肉」であり、回答者からは「国産豚肉」の品質（安全性や旨味）が優位に評価されているものと考察できる。「輸入豚肉」についてもいくつかの回答はあったが、今回は産地の設問は行っていないので、輸入元の傾向は不明である。

4. よく購入する豚肉の部位について

複数回答の結果ではあるが、「バラ」とした回答が最も多く、次いで「切り落とし」、「ロース」の順であった。使い勝手の良い部位の人気が高いことがわかる結果と言える。もっとも少ない回答が「モモ」であった。豚肉の志向が一定の脂味にあることが伺われる。

5. 日常購入する鶏肉について

鶏肉の購買傾向について調査した。回答が最も多かったのは「国産若鳥」で、次いで「国産銘柄鶏」、「国産地鶏」の順であった。意外にも「輸入鶏肉」とした回答はわずかに1であり、回答者の意識の高さが垣間見られる結果となった。

6. よく購入する鶏肉の部位について

複数回答の結果ではあるが、一般的に人気の高い「モモ肉」とした回答が圧倒的に多く、次いで「ムネ肉」、「手羽先」の順であった。これも使い勝手の良い部位の人気の高いことがわかる結果と言える。

7. 日常購入する玉子について

鶏卵の購買傾向について調査した。鶏卵の場合、殻付きの輸入卵は販売されていないので、ここでは何を目安に購入するのかを問うた。これも複数回答の結果ではあるが、最も多かったのは「白玉子」であった。

8. その他の肉について

牛、豚、鶏肉以外の肉の購買傾向について調査した。選択肢は鴨、猪、鹿、馬であったが、「特になし」との回答が最も多かった。近年、ジビエや馬肉の専門店が増え、比較的身近なものになっていると予想していたが、外食で食べることはあっても、家庭用としては購入する機会はまだまだ少ないものと考えられる。

しかしながらその中で「鴨肉」については購入するという回答があった。「その他」の中で「羊肉」とする回答がもう少しあるのではと予想していたが、わずか1名だけであった。

9. 国産畜産物可能購入価格について

近年、飼料価格を筆頭に生産資材の高騰が続いており、畜産物への価格転嫁は避けられない。そこで、消費者がイメージする畜産物の購入可能価を調査した。

「牛肉」については、例としてウデ・カタとし、回答の平均値は約819円であった。「豚肉」は肩ロースを例として、約285円、「鶏肉」は皮つきモモで約173円（牛・豚・鶏いずれも100gあたり）、「牛乳」は1パックで約236円であった。

ちなみに「買わない」という選択肢も用意したが、これを選択したのは1名だけであった。

「牛肉」以外は、例として挙げた現行価格よりも、多少は高くなっても仕方ないと思われるようだが、「牛肉」については現行価格でも高いと感じての回答と思われる。

10. 近年話題になっている大豆由来商品の購入状況について

近年、ベジタリアンやヴィーガン向けに大豆由来の肉の代替商品が多く店頭
に並ぶようになっている。そういった商品について、購入したことがあるのか、
どういったものを購入するのかを調査した。

「買ったことがない」とした回答が最も多かったが、「豆乳ヨーグルト」を購
入したという回答も全体の25%程度あった。次いで一般的な「大豆ミート」と
した回答が多かった。

11. 「JGAP」及び「アニマルウエルフェア」について

2025年に開催される大阪万博において、使用する食材については東京オリ
ンピックと同様、JAGPの認証を必要とする方針である。これらのことについ
て生産者におけるメリット、デメリットを提示したうえで、消費者としての率直
な感想を調査した。

全部で60を超える意見をいただいた。（添付資料参照）

賛否両論ではあるが、比較的不要の意見が多いようだ。いまだにアニマルウエ
ルフェアを初めて知った、よく分かっていないという意見もあり、認知度は依然
として低い状況にあると言える。

また、個人経営がそうした対応を図る際に国や府県が補助金を出すべきである
とか生産者が認証を受けるための補助金が必要との意見もあった。

IV まとめ

1. 最近の畜産物購買傾向について

大阪府の緊急事態措置が全面解除になり1年が経過した。しかしながら、道ゆ
く人々からマスクはなくなり、飲食店においても手指消毒やアクリル板などの
間仕切り、5人以上の会食お断りなど、いまだに制限が設けられた中での営業を
行っている飲食店が多い。

家庭消費に至っては、所得が伸び悩んでいる中、家計における食費を表すエン
ゲル係数は2020年に大幅に上昇し、以降なだらかな下降線をたどっているよ
うだ（総務省「家計調査」参照）。今年度には多くの食品の値上げが続いている
ことも影響しているのかもしれないが、多くはコロナ禍で制限された旅行などの
代替えであるとも言われている。

今回の調査では、それぞれの畜産物における購買傾向等を調査し、その傾向を
取りまとめて生産者にフィードバックすることを目的とした。

牛肉・豚肉・鶏肉については、国産のものを購入するという回答が多く、60代以上で6割以上を占める年齢構成ではあるが、回答者らの国産畜産物に対する信頼感が表れる結果となっている。

2. 畜産物の価格について

今日、コロナ禍の緊張が緩和し、国民が旅行や外食を楽しむ機会が増えつつある。一方、ロシアウクライナ侵攻により、生産資材や燃料の輸入価格が上昇し、我が国の生産物価格にも多大な影響を及ぼした。畜産物においても例外ではなく、飼料価格や燃料費などが高騰し、多くの畜産物の価格が改定され、家計への波及もそれなりに大きいと推察される。

そこで、畜産物が値上がりした場合、どれぐらいなら購入可能なのか、国産畜産物を選んでもらえるのかを調査したものである。

詳細は後述するが、牛肉を除いては現状価格をやや上回っても購入できるという結果であった。

3. 大豆ミートなど

近年、ベジタリアンやヴィーガンなどを提唱する者が増え、食の傾向も変わりつつあるのかもしれない。特に肉については、代用品の開発が進められており、かなり多くの種類が売場に並ぶようになった。

そこで、数多く陳列されている肉や乳の代用品について、どのようなものを購入したことがあるかを調査した。

結果的には、多くの方が購入したことが有るようで、畜産物の価格があまりにも高騰するようであれば、ベジタリアンやビーガンでない人でも、代用品を購入するようになるのかもしれない。

4. JGAPやアニマルウエルフェアについて

大阪万博では、東京オリンピック同様、JGAPの認証やアニマルウエルフェアの管理ができていないものについては採用しない方針とされている。これらの認証を受けるために生産者は数年にわたり年間十数万円の経費が必要とされる。さて、家族経営がほとんどである大阪の生産者が生き残るために、この認証が必要だろうか。

今回は認証に際し、考えられるメリットとデメリットを明記し、消費者目線での意見を調査した。

多くは生産者よりの回答ではあったが、認証の取得に肯定的な意見も複数あつ

た。国や県が承認までに必要な経費を補助できないかなどの意見もあり、そうした補助事業があれば、本会としても生産者に推進しやすいのではと思う。

消費者への認知度が低いこと、価格に転嫁されると結果的に購入できないなどの指摘もあった。